

由良川中流域の弥生時代中期の集落遺跡について

田代 弘

1 はじめに

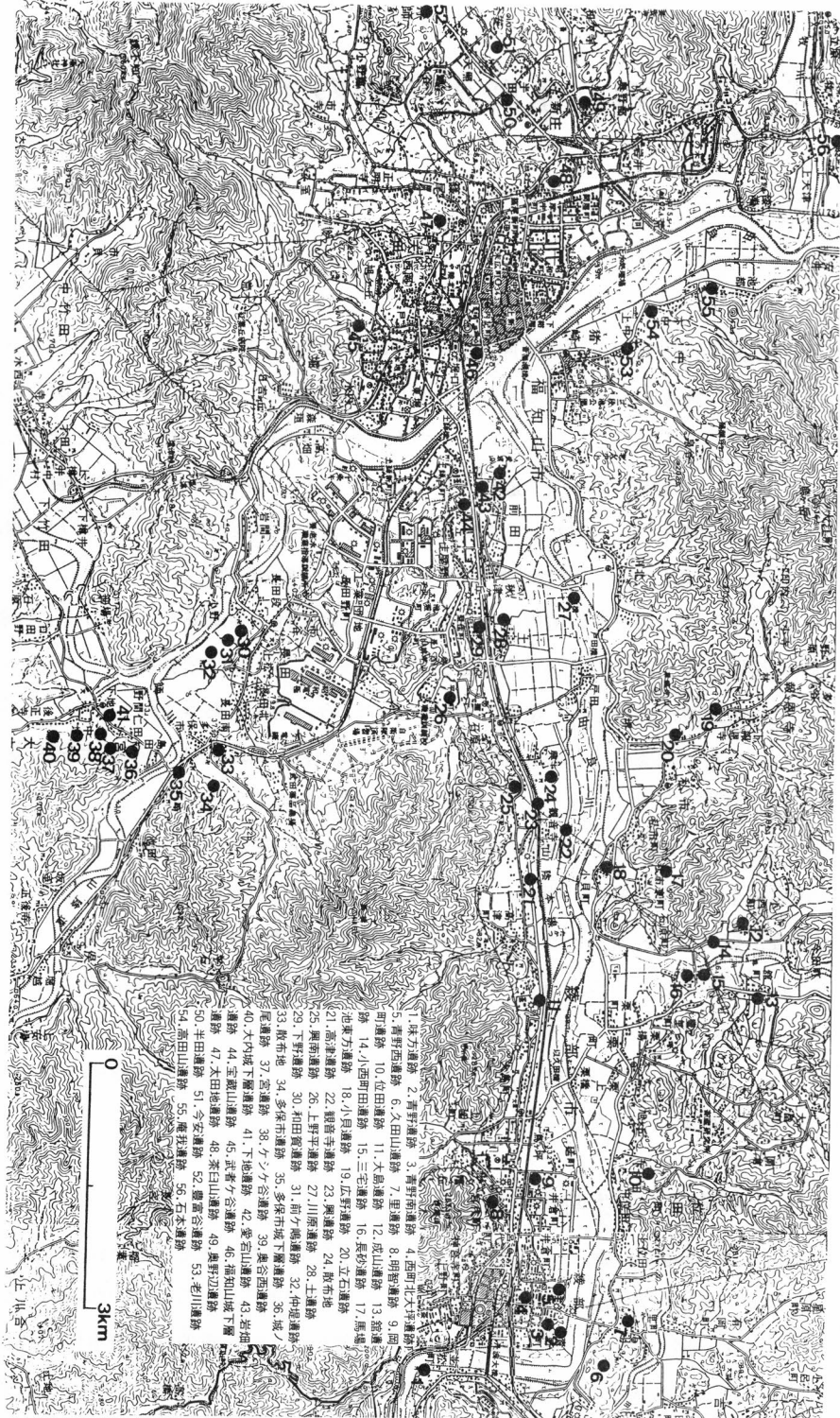
かつて佐原眞は、由良川・加古川両水系の分水嶺は200mを超えることなく瀬戸内沿岸から日本海沿岸に到達することのできる唯一のルートであること、このルートに沿って銅剣型石剣の分布がみられることなどから、この水系を「弥生時代の山陽・山陰をむすぶ道の一つ」と考え「由良川・加古川の道」と呼んだ。そして、大阪湾岸から山陰方面への銅鐸搬入がこの道を媒介として行われた可能性とともに、その重要性を説いた¹。福知山盆地は、「由良川の道」沿いでは沖積地が最も発達しており、地域的拠点となっている。

近年、由良川上流にあたる竹田川中流域の兵庫県春日町野々間遺跡で、外縁付鈕式銅鐸と扁平鈕式銅鐸が同一の埋納坑から発見された²。続いて、これらの保有集団とみられる対岸の春日七日市遺跡が調査され、第Ⅲ～Ⅳ期に盛行する大規模な集落遺跡であることが確認された³。両遺跡の調査は、石製武器形祭祀(銅剣型石剣)と銅鐸祭祀の有機的関連性を示唆する資料を提供することとなり、これに関する詳細な論考も生まれている⁴。また、由良川下流域の舞鶴市志高遺跡では住居跡群と方形周溝墓群が広範囲にわたって確認され、弥生時代中期後半期の集落構造が明らかにされている⁵。由良川中流域においてもこの時期の集落の調査が幾つか行われるようになり、綾部市青野遺跡や観音寺遺跡のような大規模集落の存在が明らかにされつつある。このように由良川流域は、考古資料の蓄積に伴ってその重要性がますます高まっていると言えよう。

本稿では、由良川中流域(福知山盆地)の中期後半(第Ⅲ・Ⅳ期)期集落遺跡を取り上げ、その分布状況と概要について記していくことにしたい。

2 由良川中流域の弥生時代中期集落

由良川中流域(福知山盆地)では、近年、発掘調査や分布調査が盛んに行われるようになり、弥生時代の遺跡は約60か所を数えるまでになった(第1図)。このうち30か所以上が弥生時代中期後半に属しており、これらの中には先に記したような重要な調査事例も含まれている。しかし、その大半は散布地及び遺物単独出土地であって、性格や帰属時期を限定できる例はまだまだ少ないのが実状である。



第1図 弥生時代遺跡分布図

そこで小稿では、発掘調査報告と併せて『京都府遺跡地図』等の分布調査記録を参照し、流域単位で検討する。

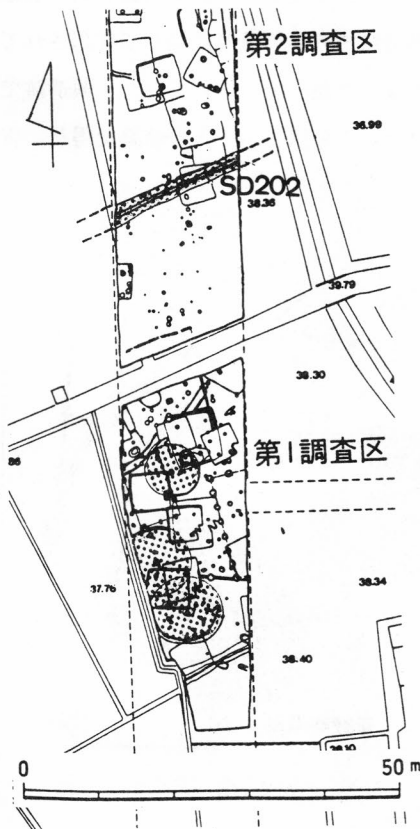
(1) 由良川本流域

由良川本流域は、地理的特徴や遺跡の分布状況から大きく東部地区、中部地区、南部地区の3つに区分することができる。

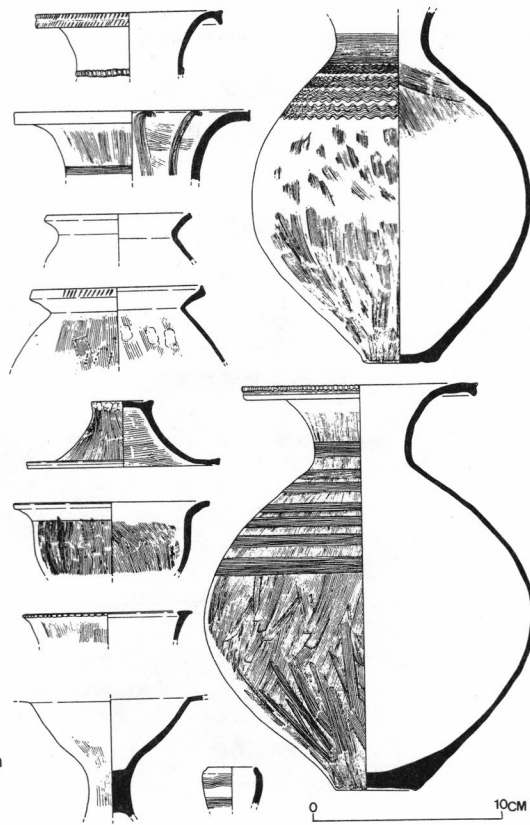
東部地区 福知山盆地東端の綾部市街地を中心とする地域である。綾部市青野遺跡・青野南遺跡・里遺跡などがある。

青野遺跡は、由良川の蛇行部に形成された集落遺跡である。集落の形成は第Ⅲ期(古段階)に始まり、第Ⅳ期に拡大する⁶。後期前半から中ごろの状況は不明であるが、隣接地点に後期後葉～末葉にかけて青野西遺跡が成立する。

青野遺跡の推定範囲は、白瀬橋から尾白稲荷付近まで長さ約800m、幅約200mに及んでいる。第Ⅲ期の遺構は、遺跡推定範囲の南東部にあたる第12次調査1・2区周辺でまとも⁷に検出されている。検出遺構には、溝、土壇、住居跡等がある(第2図)。



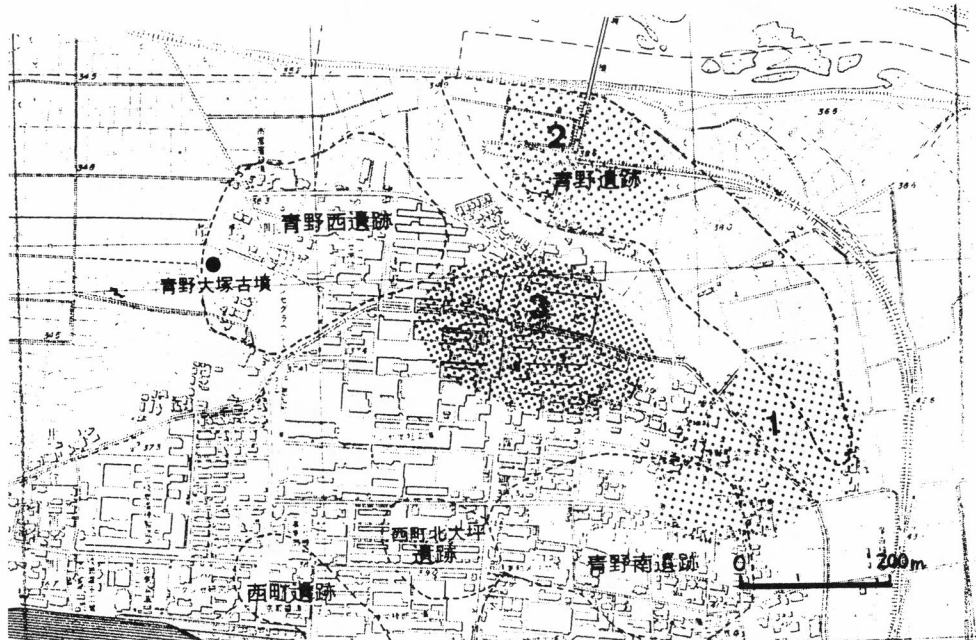
第2図 青野遺跡(第Ⅲ期)



第3図 青野遺跡12次SD202出土遺物

溝は、第2調査区で検出されており、幅2m以上、深さ約1.4mを測る。断面はV字形を呈する。溝底から完形の個体を含む土器が出土している(第3図)。住居跡は、SD202から30~40m南方の第1調査区で3基以上確認されている。この住居跡(SB114~116)は、直径が9m前後の円形である。遺物の共伴は無く時期不明として報告されているが、遺構検出時に住居上面にあたる地点で第Ⅲ様式古段階の土器が数多く採取されていること、この時期の土壇や溝(SD102・105)が近接して存在していることなどから、SD202と同じ時期に属するものと考えたい。この溝について調査者は、遺物が中~下層から出土し時期が限られることや、断面形(V字形)・埋土からみて区画を目的として掘削されたものであろうと考えている。環濠の一部であろう。第Ⅲ期の集落はこの溝を北限とし、南側に展開すると推測される。南接する地点で第Ⅲ期の方形周溝墓が確認されている(青野南遺跡第6次調査)⁹が、この地点は青野遺跡第Ⅲ期集落の墓域にあたるのではないだろうか。

第Ⅳ期集落は中心を西方に移し、青野変電所付近を中心として自然堤防縁辺部に広範囲にわたり土壇群を形成する。これまでに数十基を数える土壇が検出されている。土壇の平面形態は楕円形で、底面は船底形を呈する。供献とみられる完形土器群や磨製石剣・石鏃を出土するものがある。この種の群集土壇は、志高遺跡で方形周溝墓に接して確認されており、後述するように、福知山市興遺跡でも環濠集落の外側に配置されていた。興遺跡では、土壇の一つについて埋土の脂肪酸分析を行ったところ墓壇であるとの結論を得た。青



第4図 青野遺跡分布概念図

1. 第Ⅲ期集落推定域 2. 第Ⅳ期土壇集中区 3. 第Ⅳ期居住区推定域

野遺跡の土壌群も同様の性格が考えられよう。

調査は、14次にわたって実施されているが、居住域はまだ確認されていない。これは、現在の推定範囲は概ね墓域であり、居住域はこの範囲外にある可能性が高いことを物語るものであろう。墓域南方の段丘縁辺部を居住区の候補地として挙げておく(第4図)。

青野南遺跡¹⁰、里遺跡¹¹、味方遺跡¹²では第Ⅳ期の土器・石器がそれぞれ少量出土している。青野遺跡を核として分岐した小規模集落が存在するものと思われる。

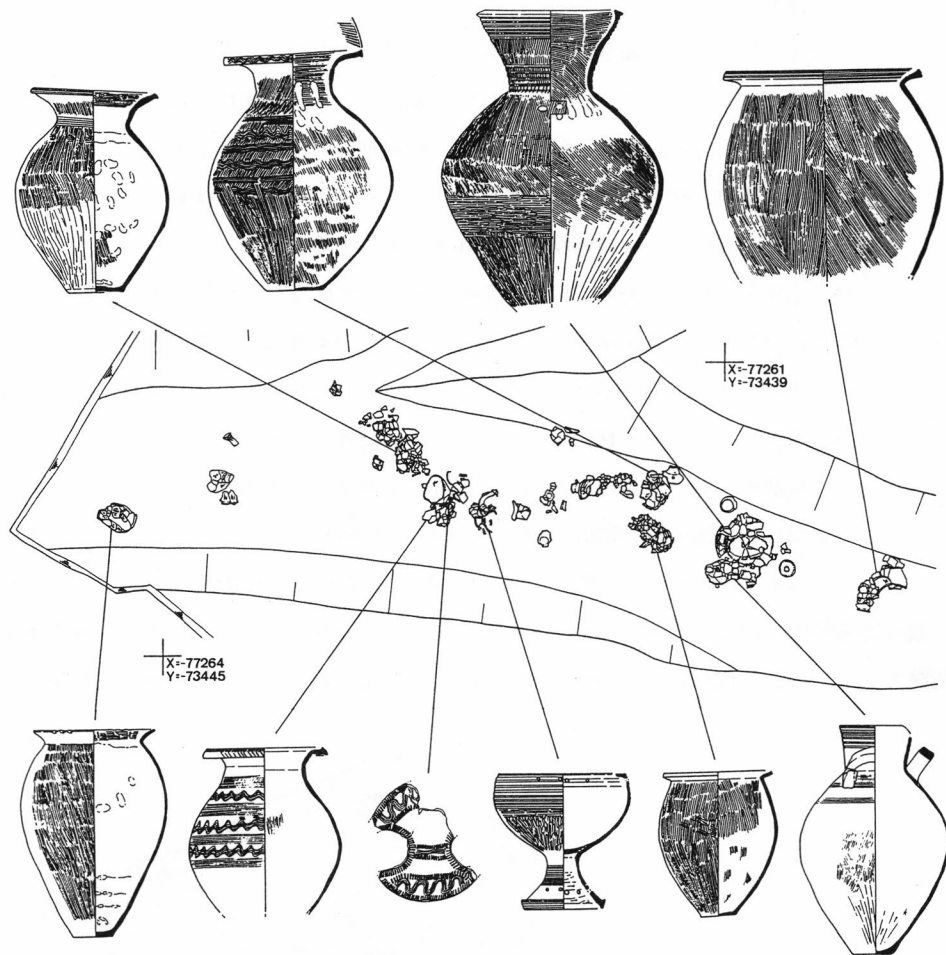
青野遺跡の上流約6kmの地点に下替地遺跡がある。由良川左岸の段丘上の遺跡で、宅地造成の際に鉄剣形磨製石剣が単独で出土している¹³。第Ⅳ期集落の存在が予想される。下替地遺跡は、上林川と由良川の合流部より約500m上流に位置しており、由良川と上林川を中継する位置を占める。奥上林陸寄町出土石剣との関連が注意される場所である。

中部地区 綾部市街地と由良川・土師川合流部の中間地点にあたる。由良川氾濫原の自然堤防上に立地する低地遺跡(福知山市観音寺遺跡・興遺跡・土遺跡)と、段丘ないしその縁辺に立地するもの(綾部市小貝遺跡・福知山市興南遺跡・上野平遺跡)とがある。

観音寺遺跡は、由良川現河道に沿って伸びる帯状の自然堤防上に営まれた大規模な集落遺跡である。1920年代初期に銅剣形石剣(有樋式)が採集されており、早くから弥生時代の¹⁴



第5図 興遺跡遺構検出状況



第6図 SD01遺物出土状況

遺跡として周知されてきた。近年、近畿自動車道建設工事に伴って調査が実施され、中～後期の遺構・遺物が検出された。遺構は、度重なる氾濫と河道変動の影響で大半が流失しており、小規模な溝や土壇が検出されたただけであったが、旧流路や包含層で多数の遺物が得られ、これらの検討を通して、当遺跡は中期後半(第Ⅳ期)以前に成立し後期後半まで継続していたことが明らかにされた¹⁵。銅剣形石剣の存在や遺跡規模からみて、この遺跡は第Ⅳ期において当該地域の中核をなしていたものと思われる。

興遺跡は、観音寺遺跡の南方約500mに位置する第Ⅳ期に成立した集落遺跡である(第5・6図)。溝の一部と土壇群が検出されている。溝は、自然堤防の傾斜変換線に沿って弧状に巡り、陸橋部らしい掘り残しがあることから環濠の一部と考えられる。土壇群は、この溝の外側に約20mの空白部において分布しており、50基以上が検出されている。各土壇

の平面形態は楕円～不正形な円形を基本としており、低面は船底形である。青野遺跡出土土壌と近似する規模形態を有している。これらの土壌からは壺・甕をはじめ、高杯と壺を合わせ口にした壺棺とみられるものや、磨製石剣、木製簪などが出土している。土壌の埋土を脂肪酸分析した結果、高等動物由来の脂肪酸が高い値で検出されており、この土壌は人体埋葬遺構である可能性が極めて高いものとなった。各土壌は、切り合ったり、主軸を異にしながらも一定のまとまりを有している。多くは墓墳であり、集落外縁に墓域を形成していたものと考えられる。興遺跡では、集落中心部の調査には至らなかったものの、環濠集落の集落構成について具体的な情報を提供することとなった。

興遺跡で検出されている弥生時代の遺構は、ほとんどが第Ⅳ期に属し、環濠も後期に至らずに埋没している。継続期間が短く、観音寺遺跡から分岐した集落とみられる。

由良川右岸段丘の小貝遺跡では第Ⅳ期の方形周溝墓が1基¹⁷検出されている。湯殿付近に集落が想定される。興遺跡同様、観音寺遺跡との関連が考えられよう。興南遺跡は、興遺跡のすぐ南側にある標高約50mの丘陵上に立地しており、茶畑造成の際に数多くの弥生土器が出土したという。この時に出土した台付壺や広口壺(第Ⅳ期)などが福知山高等学校資料室に保管されている¹⁸。眼下の興遺跡とは30m以上の比高差があり、丘陵端は急峻な斜面をなして日常的生活の場としては不適である。興・観音寺遺跡を経営主体とした高地性集落である可能性が高い。

西部地区 土師川との合流部地域をさす。この地域は早くから沖積部が市街化していることもあり、低地立地の集落遺跡はまだ確認されていない。

福知山市岩畑遺跡・愛宕山遺跡・福知山城下層遺跡・高田山遺跡などがある。岩畑遺跡は、段丘縁辺に立地し、鉄剣形磨製石剣、磨製石斧、石包丁、打製石鏃・錐など石器多数が採集されている¹⁹。隣接する愛宕山(独立丘陵、標高約55m、沖積面からの比高約30m)山頂付近では、第Ⅳ期の高杯3個、台付鉢1個が「頂上の方に口縁部を揃えて並べられた²⁰」状態で出土しており、山頂平坦面に第Ⅳ期の居住区があるものと推測されている。

福知山城下層遺跡も愛宕山遺跡同様、沖積地を見下ろす独立丘陵上に立地し、第Ⅳ期の土器が採集されている²¹。右岸にある高田山遺跡²²でも丘陵頂部において同期の土器が採取されている。これらは、沖積面からの比高差20～30mの高所に立地し、展望に優れる点で共通している。和久川下流の茶臼山遺跡はⅤ期の高地性集落である²³。

(2) 上林川流域

上林川は、福井県境に端を発し、谷沿いに狭長な沖積地を約3kmにわたって発達させながら南西流し、綾部市山家付近で由良川と合流する。この流域は、周囲を山に閉ざされた閉鎖的な地形をなしているが、谷ごとに沖積地がみられ、谷水田経営の適所となってい

る。中・近世には上林川に沿って若狭に抜ける峠越えの街道が発達し、現在も地方主要道として重要な位置を占めている。この地域は、下流から順に口上林・中上林・奥上林に大きく区分されている。

上林川流域では考古学的な調査が進んでおらず、遺跡の分布状況が明らかでない。弥生時代の遺跡としては、睦寄町行道前遺跡が知られるのみである。この遺跡は、奥上林川小学校敷地のある低位段丘上に位置しており、上林川右岸にあたる。この遺跡からは鉄剣形磨製石剣が出土している²⁴。完形で、長さ20.6cmを測る。第Ⅳ期のものであろう。出土地は奥上林小学校敷地内で、同時期の集落が小学校を中心に広がっているものと考えられる。

睦寄町行道前遺跡は、福井県境の分水嶺(永谷)からわずかに1.5kmの場所に位置しており、若狭と由良川中・下流域の地域間交流を媒介する役割を担っていた可能性が高い。中上林、口上林での調査に期待したい。

(3) 犀川流域

犀川は綾部市・舞鶴市境の登尾峠及び岳山麓に端を発し、幾つかの支流を集め、綾部市小貝町上小貝で由良川と合流する。流域沿いには小規模ながら発達した沖積地が谷ごとに見られ、氾濫原を主とする由良川本流域に比べ安定した谷平野を形成している。下流域で館遺跡、三宅遺跡、長砂遺跡などが確認されている。

館遺跡は、以久田野丘陵から西に伸びる標高約45mの舌状台地上にある複合集落遺跡であり、東西約400m、南北約300mの範囲に遺物が散布している。1918年頃、遺跡推定範囲のほぼ中央にある赤国神社境内で土木工事が行われた際に、多数の遺物が採取され遺跡であることが確認された²⁵。この時に採集された弥生土器は前期～後期にわたっており、弥生時代全期を通じて集落が継続していたと考えられている。1985年度に館地区圃場整備事業に伴い、遺跡東南斜面地域で範囲確認のための試掘調査が実施され、弥生時代中～後期(第Ⅳ・Ⅴ様式)の溝、ピットなどの遺構が初めて確認された²⁶。

館遺跡南方約1kmの低位段丘上に三宅遺跡、長砂遺跡がある。三宅遺跡は、近畿自動車道敦賀線建設工事に伴い調査が実施され、Ⅳ期の方形周溝墓群が検出されている²⁷。方形周溝墓群は、6～7基以上からなる。調査区内では生活関連遺構が確認されていないことから、この地点は墓域として設定されていたと考えられる。長砂遺跡は三宅遺跡と同一段丘にあり、三宅遺跡に南接している。豊里中学校を中心に広がる遺物散布地であり、太型蛤刃石斧等が採集されている²⁸。三宅遺跡の造営主体集落が存在する可能性が高い。

(4) 土師川・竹田川流域

土師川は、天田郡三和町から北西流し、途中、福知山市宮付近で竹田川を合わせ、福知山市街東方で由良川と合流する。土師川・竹田川合流域は氾濫原であり、この流域で最も

広い沖積地を形成している。竹田川上流域は前述のように加古川水系と直結しており、この合流域は由良川水系と加古川水系の結節点としての重要性を帯びている。竹田川上流約12kmの地点には、この水系最大の集落(第Ⅲ～Ⅳ期)である春日・七日市遺跡がある²⁹。

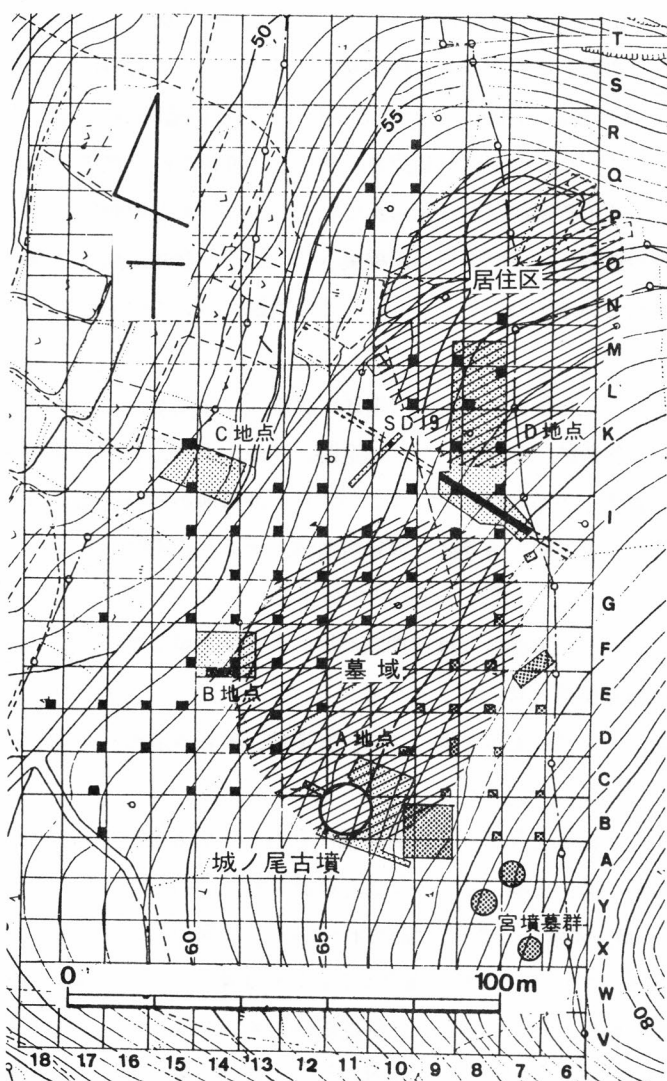
沖積地とそれに臨む丘陵上でいくつかの遺跡が確認されている。沖積地に立地する遺跡として下地遺跡、前ヶ嶋遺跡、和田賀遺跡などが知られているが、いずれも散布地であり詳しいことは分からない。下地遺跡からは磨製石斧が採集されている。福知山高等学校に所蔵され「宮の石斧」と呼ばれているものがそれであり、この遺跡については中期に属するものと考えてよいであろう³⁰。

近畿自動車道の建設工事に伴って丘陵上に立地する遺跡が相次いで発見された。大内城下層遺跡、奥谷西遺跡、ケンケ谷遺跡、宮遺跡、城ノ尾遺跡、多保市遺跡、多保市城下層遺跡等である³¹。丘陵縁辺に位置する多保市遺跡を除き、いずれも沖積地からの比高差20～30mの丘陵先端に立地している。大内城下層遺跡、奥谷西遺跡、ケンケ谷遺跡、宮遺跡、城ノ尾遺跡は同一丘陵にあり、約800mの間にはほぼ等間で分布している。これらの眼下には下地遺跡がある。丘陵上のこれらの遺跡群は継続期間が短い小規模な集落であり、下地遺跡などを集落母体とした高地性集落と考えることができる。

宮遺跡が第Ⅲ期に属する他は、いずれも第Ⅳ期である。宮遺跡、奥谷西遺跡、ケンケ谷遺跡について検討していくことにしたい。

宮遺跡は、土師川と竹田川の合流域を見下ろす丘陵斜面に立地する集落遺跡である³²。比高差約30mを測り、方形周溝墓と溝、土壇、住居跡などが確認されている(第7図)。方形周溝墓はA地点で2基(SD02・03、周溝の一部)が確認されており、周溝からは第Ⅲ期古段階資料を中心とする土器が出土している。方形周溝墓から約70m北東のD地点で検出された溝(SD19)は、等高線を切断するようにして走り、試掘部分とあわせ50m以上が確認されている。この溝は、丘陵頂部付近から裾部付近まで伸びていた模様であり、丘陵を区画するように配置されている。規模は、幅約2.2m、深さ約1.8mを測り、断面は台形である。第Ⅲ様式古段階の土器がまとまって出土している。この溝の西側では住居跡1基(SB16)と土坑1基(SK17)が確認されている。土坑からも溝と同時期の土器が一括出土している。住居跡も同時期のものだろう。調査担当者はこれらの遺構に伴う土器について「第Ⅲ期新段階から第Ⅳ期平行」と理解しているが、SD19・SK17出土土器の形態及び文様は明らかに凹線文出現以前の様相を示しており、古段階として認識すべきであろう。青野遺跡第14次調査SD202出土資料と併行関係にあるもの³³と考える。

以上のように宮遺跡では、断片的な資料ではあるが、第Ⅲ期(古段階)の集落構造をある程度類推し得る資料を得ている。集落範囲は東西150m以上、南北はC地点の北西の緩傾

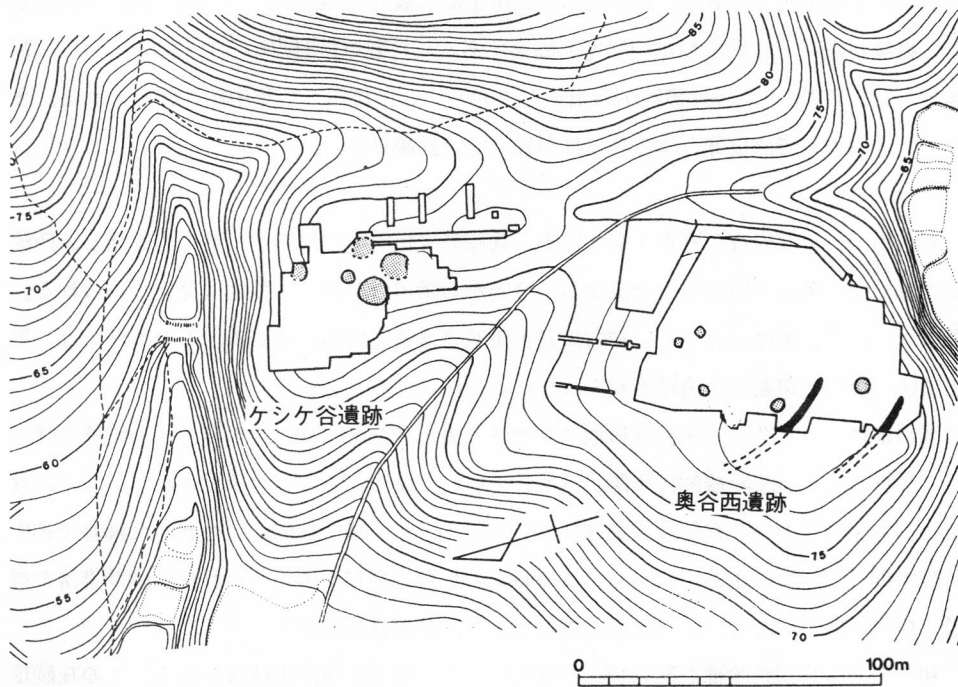


第7図 宮遺跡遺構分布概念図

斜地(標高45m前後・未調査)に及んでいたものと考えられる。居住区はSD19以北に広がり、SD19以南はおおむね墓域であろう。SD19について調査者は、集落と墓域を画する溝と考えているが、「集落と墓域とを画する溝」である以上に、南西方向(竹田川上流地域)を意識した防御施設であったのではないだろうか。この溝の東側はかつて浅い谷であったことが試掘調査で確かめられており、防御機能をさらに高めるため溝を谷斜面に設定したものと推測される。

奥谷西遺跡は、標高約77mの丘陵頂部平坦面に立地している³⁴(第8図)。丘陵前端は、急峻な斜面で、比高は約40mを測る。丘陵の西側斜面に弧状の溝を2重に巡らしている。どちらも幅約3m、深さ1m前後の規模をもつ。溝間の距離は約25mである。前端側の溝は断面形が台形でしっかりと掘られているが、内側の溝はやや浅く船底状である。丘陵下方から侵入する外敵に備えた防御目的の区画溝であろう。

溝の内側で第Ⅳ～Ⅴ期の遺構が検出されている。第Ⅳ期の遺構には堅穴住居跡(1・2・3号住居)、方形遺構、柱穴群などがある。堅穴住居は直径4～5mの円形で、約20～30mの距離を置いて分布する。方形遺構は、一辺3m前後で、2基確認されている。平坦な床



第8図 ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡遺構配置図

面には、炭・焼土が顕著にみられ、住居跡の可能性が指摘されている。竪穴住居・方形遺構は尾根基部を内側にして弧状に配置されており、中央は広場になっている。この広場では時期不明の柱穴が多数確認されており、掘立柱建物の存在が推定される。

土器の他、打製石鏃、磨製石剣、磨製石斧、環状石斧、敲石、石皿などがある。

ケシケ谷遺跡は、奥谷西遺跡の北側100mの隣接する尾根にある³⁵。この尾根は、基部で奥谷西遺跡と接続しており、両者の有機的な結びつきが推測できる。ケシケ谷遺跡同様に第Ⅳ～第Ⅴ期の遺構群が検出されている。第Ⅳ期の遺構は竪穴住居跡・土壇などがある。確実に第Ⅳ期に属する竪穴住居跡がSH102・135・72・118の4基、SH136は遺物をあまり伴わないがその可能性が高い。竪穴住居跡は、直径約5m前後のもの(SH102・135)と約10m前後のもの(SH72・118)とがある。後者は第Ⅴ期住居(SH135)と同規模であり、奥谷西遺跡の第Ⅳ期末～Ⅴ期初頭に6号住居が9mと大型化する傾向を考慮すれば、SH102・135→SH72・118という築造時期差を指摘することができるだろう。

ケシケ谷遺跡では、奥谷西遺跡とは反対に、尾根基部側に住居が造られ、広場は丘陵先端部にかけて認められる。広場には住居群に接して柱穴群があり、SB163のような掘立柱建物が複数あったものと思われる。丘陵先端部にあたる24P地区ピットからは分銅形土製品が出土しており、祭祀の場と考えられている。

石器が多数出土しており、剥片を含めた出土総点数は366点ある。定形的なものは109点で、打製石鏃などの武器類が約34%と高率である。打製石鏃34点のうち12点が16N、17M地区などSH72埋土及び近接地から出土しており、この住居への集中傾向が見られる。またこの住居周辺では投弾とみられる球形礫が3点採集されている。

(5) 和久川流域

和久川は、京都府夜久野町・福知山市、兵庫県青垣町境の烏帽子山麓に源を発し、西流して福知山市荒河で由良川と合流する。今安から半田にかけて沖積地の発達が見られる。和久川上流は、榎峠を介して、加古川最上流域である青垣町に通じる。この流域では、半田遺跡と奥野辺遺跡の2遺跡が知られている。

半田遺跡は、和久川下流の沖積地に立地する集落遺跡で、1971年の発掘調査で縄文時代から中世にわたって断続的に集落が営まれていた遺跡であることが確認された。³⁶この調査では、弥生時代中期の遺物は確認されていないが、その後、1990年に行われた調査で弥生時代中期(第Ⅳ期)の土器が出土し、この時期の集落の存在が確かめられた。³⁷中期集落の規模・内容は明らかでない。奥野辺遺跡でも土器多数が採集されている。³⁸

和久川と由良川合流部を臨む標高約60mの独立丘陵上に茶臼山遺跡がある。この丘陵頂部の平坦面で、土木工事作業中に第Ⅳ期の高杯等の土器が採集されている。土器採集地点は沖積面からの比高差が約30~40mを測る。福知山城下層遺跡、愛宕山遺跡と良く似た立地である。これらは、墓である可能性を残しているが、ケシケ谷遺跡、奥谷西遺跡や丹後・但馬で増加しつつある諸例から高地性集落である可能性を指摘しておきたい。

(6) 牧川流域

牧川は、小坂峠に源を発して南流した後、夜久野町上夜久野付近で流れを変え、東流して福知山市牧で由良川と合流する。牧川流域は、上流域の上夜久野盆地以外では沖積地が発達せず、耕作地は牧川に流入する小河川を利用した谷水田が大半を占めている。上流域では、夜久野町平野臼ヶ森遺跡・日置遺跡・今西中遺跡・福知山市牧遺跡などが知られている。この地域は、夜久野ヶ原を境にして西は、山東町・和田山町へ、直見川・板生川を介して北は丹東町に接しており、福知山盆地と但馬を結ぶ要衝である。

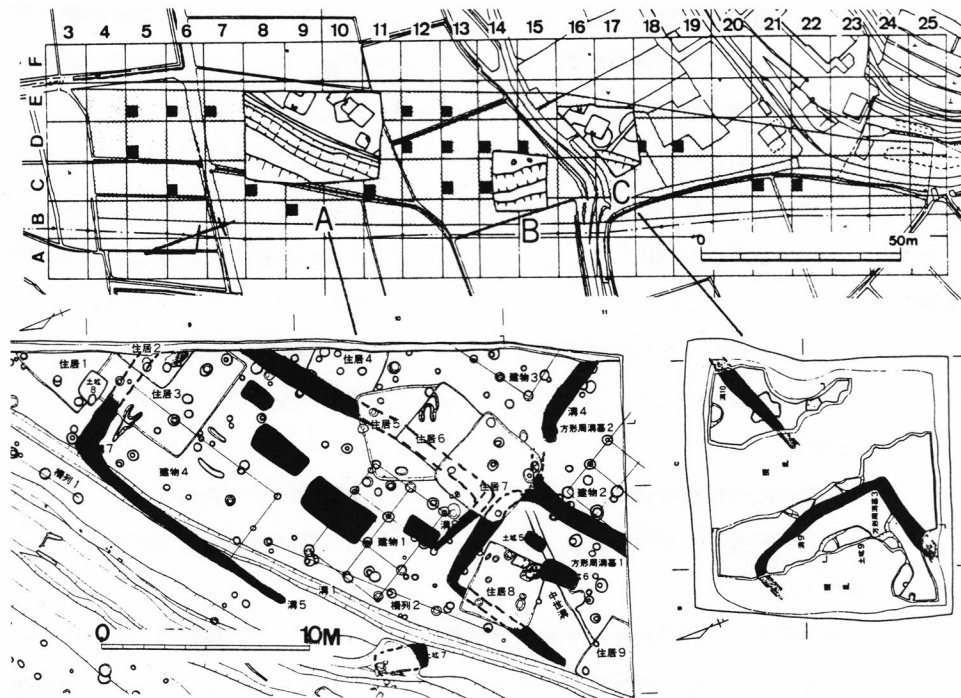
平野臼ヶ森遺跡は、牧川の上流域を構成する板生川と直見川の合流部に形成された沖積地に立地する遺跡で、圃場整備に伴って広範囲にわたって遺物が出土した。第Ⅳ様式の弥生土器、磨製石斧、打製石鏃などがある。³⁹

日置遺跡は牧川左岸の段丘上に位置し、銅剣形石剣、石包丁が採集されている。銅剣形石剣はいわゆる有樋式石剣である。⁴⁰土器類が出土していないため集落本体を特定できていないが、おそらく同一の段丘上に存在するものと思われる。今西中遺跡では丘陵の裾部で

台付壺が出土している。近接地に小倉田・先ノ段遺跡、稲泉遺跡などの散布地が知られており、河川沿いに小集落が複数分布しているのだろう。平野白ヶ森遺跡、日置遺跡は当地域の中核的集落となる可能性が高い。今後の周辺での調査が期待される。

下流域には、石本遺跡がある。石本遺跡は、牧川・由良川合流域左岸にある独立丘陵北西斜面に位置している。この地点は平坦な沖積地で水田となっていたが、調査の結果、かつては微高地であったことが確認され、その縁辺部で弥生時代中期の方形周溝墓群、後期の住居跡、古墳時代後期の溝・住居跡等が検出されている。⁴¹

方形周溝墓は、第Ⅳ期のものである。A・B2地区で4基以上が確認されており、この2地区にまたがって墓域が形成されていたものと考えられている(第9図)。方形周溝墓群に対する調査は部分的なため全体の規模は明らかでないが、分布状況からみて南北約100m以上にわたるものと思われる。調査地区は微高地の西縁にあたっているため、墓域の中心はこの東側に及ぶものと思われる。4基の方形周溝墓のうち、A地区の1基は長辺約16~17m、短辺約10mと大型で、主体部を3基持っている。他の方形周溝墓の平均的規模が約8m前後であるから、平面規模はこれらの約2倍ということになる。世帯共同体を構成する家長群の階層差を示すものであろう。



第9図 石本遺跡方形周溝墓配置図

3 ま と め

以上、流域ごとの遺跡分布と概要を記したが、簡単に帰属時期をまとめておく。現在のところ、第Ⅲ期に属する遺跡は青野遺跡(第12次・青野南遺跡第6次)と宮遺跡の2例のみで、いずれも古段階に属するものである。第Ⅲ期新段階の土器は青野遺跡、館遺跡、観音寺遺跡等に散見するが一括資料に恵まれず、この時期の集落实態は明らかでない。資料の蓄積が望まれるところである。凹線文の盛行する第Ⅳ期は発掘調査事例も比較的多く、土器組成や集落構造に関する情報が比較的充実している。先に取り上げた遺跡の大半は、この時期に帰属するものだろうと考えている。

次にまとめを兼ねて幾つか気づいたことがらを列挙しておく。

(1) 集落構造

第Ⅲ期の宮遺跡、青野遺跡(第12次)は共に、居住区と墓域(方形周溝墓)から成り、居住区外縁には防御的性格の強い溝を配置している。宮遺跡は高地性集落であり、低地立地の青野遺跡とは対照的なありかたを示す。この2つの遺跡は確実に第Ⅲ期古段階に属するものであり、この時期の集落实態を知り得る数少ない事例として重要である。

第Ⅳ期は地域拠点となす集落が大型化する。集落全体にわたる調査例はないが、興遺跡や石本遺跡、三宅遺跡、青野遺跡などの大型集落では、居住域に隣接して墓域を広範に形成していたようである。第Ⅲ期の集落が拡大された姿を想像することができよう。環濠の存在が明らかなのは興遺跡だけであり、設置目的や継続期間などの詳細は明らかでない。

墓域は、土壙墓と方形周溝墓から成り、それぞれ群集する傾向がある。両者は同一地点で共存、重複することが無いことから、墓域形成にあたって厳密に区別されていたものと考えられる。志高遺跡の墓域内には、土壙群が方形周溝墓群に隣接して存在しており、石本遺跡、青野遺跡、三宅遺跡などでもこれと同様の墓域構成を有していると思われる。土壙墓と方形周溝墓という埋葬形態の差異は、共同体内部での階層差を示すものと見られる。方形周溝墓群内にも規模の大小があり、特定階層内での重層性を示唆している。

(2) 高地性集落

いずれも広義の高地性集落に属するものであり、性格を限定できる資料はない。第Ⅲ期古段階の例として宮遺跡があり、比高差約30mの丘陵斜面に墓域を伴う単位集団の基本生活領域が推測される。

第Ⅳ期高地性集落は、独立丘陵上や狭長な尾根上に立地し、1～3棟前後の堅穴住居から成る。付帯施設として掘立柱建物や土坑を伴うが墓域は形成しないようである。奥谷西遺跡・ケンケ谷遺跡では3棟前後の堅穴住居が弧状に等間配置され、広場に掘立柱建物が

建つなど計画的な集落配置が認められた。ケンケ谷遺跡は、石器組成の上では武器類が卓越するが、石皿、敲石、磨石などの調理用石器も多数見られる上、農耕儀礼にかかわる分銅形土製品が出土しており、日常的経営を行っていたようである。生産と消費の最小単位（世帯共同体）で成り立っていた集落と考えられる。これに対して、兵庫県豊岡市亀ヶ崎遺跡⁴²・中ノ郷深谷遺跡⁴³・京都府弥栄町オテジ谷遺跡例⁴⁴などでは丘陵頂部に堅穴住居が単独で設営されており、奥谷西遺跡等に比べ経営時期が短く「物見橋」的性格が強い。

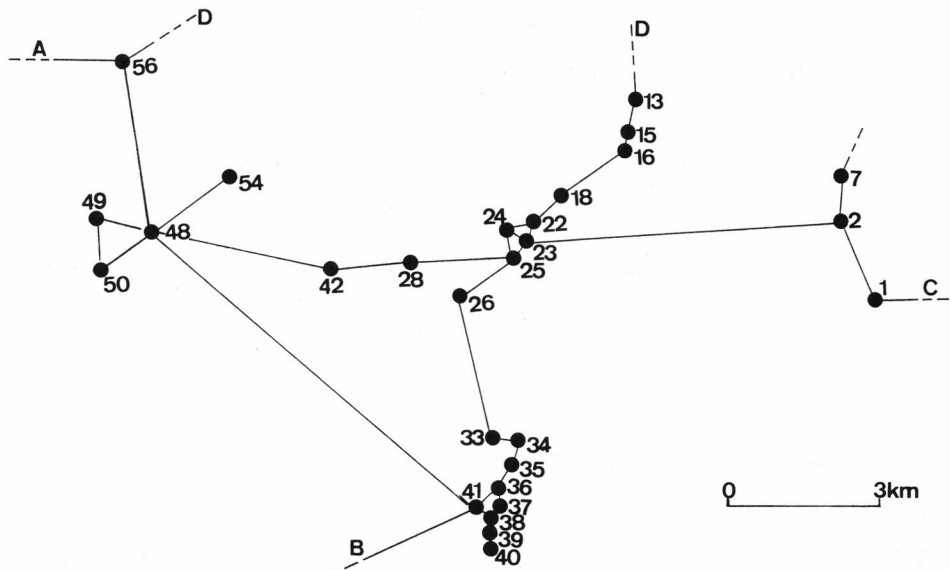
第Ⅳ期の高地性集落は、土師川・竹田川合流域で集中して確認されているが、由良川本流域沿いでも興南遺跡・福知山城下層遺跡・愛宕山遺跡・高田山遺跡など比高20～30mの展望に優れる丘陵頂部で第Ⅳ期の土器の出土が知られており、高地性集落である可能性が高い。先に触れたが、奥谷西遺跡・ケンケ谷遺跡の場合、眼下に母集落と目される下地遺跡があり、興南遺跡では興・観音寺遺跡がある。これらの集落は、母集落から分岐・派生し、母集落と有機的関係を保ちながら存立していたものと考えられる。

第Ⅳ期は、環濠集落の大規模化や高地性集落の出現、武器形石製品の大型化・量産化などから瀬戸内沿岸地域を広く巻き込んだ大規模な社会的緊張の存在が指摘されている⁴⁵。また愛知県尾張地域では、この時期にあたる高蔵期に区画溝等の防御施設を有する集落が顕在化する⁴⁶という。近畿地方北部地域においては確認事例が少なく不明な点が多いが、ここで指摘した高地性集落は、当該地域がこうした社会的緊張と無関係でなかったことを示す事例と言えそうである。

(3) 第Ⅳ期集落遺跡の分布

第10図は、第Ⅳ期各遺跡相互の位置関係を示したものである。これによると、河川合流域や各流域で要衝となる地点に遺跡が集中していることがわかる。集中地点の中核には青野遺跡(由良川東部)、三宅遺跡(犀川)、観音寺遺跡(由良川中部)、石本遺跡(牧川・由良川合流部)などの大型集落が存在しており、その周辺に小規模集落が群在する傾向が認められる。土師川・竹田川流域では、下地遺跡、和久川流域では半田遺跡が中核的存在となる可能性が高い。推測の域を出ないが、福知山市街地となっている土師川・由良川合流部でも将来、同様の大型集落が確認されると思われる。

大型集落を核としたこれらの遺跡群は、全てが同時期に存在したという確証はないが、「小地域」とでもいべき地域単位をなして消長を遂げたであろうことは想像に難くない。「小地域」は、3～5kmの距離を置いて流域に沿って連鎖しており、さらにその間には小規模集落がこれらを繋ぎ止めるように存在している。「小地域」はまた、支流域を通じ上流域とも連鎖している。由良川東地域は、下替地遺跡(約5km)、下替地遺跡は若狭へ通じる上林川上流の睦寄町行道前遺跡(約12km)へと連鎖し、犀川流域は桑飼下遺跡、志



第10図 第Ⅳ期集落遺跡位置関係図

A:日置遺跡 B:春日七日市遺跡 C:下替地遺跡 D:志高遺跡

高遺跡のある由良川下流域へと連鎖し、石本遺跡は、日置遺跡、平野臼ヶ森遺跡を通じ、但馬へと連鎖する。土師川・竹田川合流域は、竹田川中流域の第Ⅲ～Ⅳ期の中核的集落である春日七日市遺跡、野々間遺跡まで、わずか12kmの位置にある。

このように見ると、由良川中流域においては、第4期に流域を覆う緊密な社会(大地域)⁴⁷が存在していた可能性を指摘することができる。

4 おわりに

当該地域では、近年幾つかの大規模調査が実施されるようになり、弥生時代集落遺跡に関する新たな資料が蓄積されつつあるが、いずれも断片的であり、集落の全体像を明らかにするには至っていない。土器についても一括資料に恵まれないことから定見がなく、流動的である。冒頭で述べたように当該地域は早くから重要性が説かれてきたところであるが、現在のところなお資料蓄積の段階にあり、研究は緒についたばかりといっても過言ではない。本稿では比較的資料の多い中期後半期の集落遺跡を取り上げ、主に分布状況を中心にまとめた。

なお、各遺跡の帰属時期や継続期間などについては編年観を明示したうえで検討すべきであったが果たせず、主観的なものとなった。本稿が当地域研究を進めていくうえで役立つれば幸いである。大方の御批判を乞うところである。

最後に、本稿作成にあたっては綾部市教育委員会近澤豊明氏、福知山市教育委員会崎山正人氏、京都府教育委員会肥後弘幸氏、当調査研究センター平良久氏・奥村清一郎氏に事実関係について多くの御教示を得た。記して謝意を表します。

(たしろ・ひろし=当センター)

- 1 佐原眞「大和川と淀川」(『古代の日本』5 角川書店) 1970
- 2 『野々間遺跡』 兵庫県氷上郡春日町教育委員会 1990
- 3 『七日市遺跡(2)』 兵庫県教育委員会 1990
- 4 種定淳介「銅剣形石剣試論(上)・(下)」(『考古学研究』第36巻第4号、第37巻第1号) 1990
- 5 肥後弘幸ほか「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告』第12冊) 1989
- 6 『青野A地点発掘調査報告書』 青野遺跡調査報告書刊行会 1976。この調査を初めとしてこれまでに綾部市教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター等により14次の調査が実施されている。
- 7 中村孝行「青野遺跡第12次調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第15集 綾部市教育委員会) 1988
- 8 綾部市教育委員会近澤豊明氏の御好意により資料を検討する機会を得た。
- 9 近澤豊明「青野南遺跡第6次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第17集 綾部市教育委員会)1990
- 10 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 11 田代弘「里遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 12 西岸秀文・引原茂治「味方遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 13 綾部市山家下替地に所在する。綾部市教育委員会保管。未報告。近澤豊明氏教示。
- 14 梅原末治「西中筋村石剣発見の遺跡」(『京都府史跡名勝地調査会報告』第3冊 京都府)1922
- 15 黒坪一樹「観音寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 16 田代弘「興遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 17 黒坪一樹「小貝遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 18 『福知山高校資料室収蔵品目録考古資料編』京都府立福知山高等学校 1989
- 19 増田信武「前田小字岩畑採集の遺物について」(『史談ふくち山』第360号 福知山史談会) 1982
- 20 『福知山市史』第1巻 福知山市 1976
- 21 福知山市教育委員会崎山正人氏教示。
- 22 小池寛「高田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 23 『丹波の古墳Ⅰ』 山城考古学研究会 1983
- 24 『綾部市史』第1巻 綾部市 1976

- 25 梅原末治「館弥生土器遺跡」(『京都市史跡名勝地調査会報告』第2冊 京都市) 1920
- 26 中村孝行「館遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会) 1989
- 27 竹原一彦「三宅遺跡」(『京都市遺跡調査概報』第36冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 28 『京都市遺跡地図』第2分冊 京都市教育委員会 1987
- 29 注3と同じ。
- 30 注18と同じ。
- 31 『京都市遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 32 辻本和美「宮遺跡」(『京都市遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 33 注7と同じ。
- 34 藤原敏晃「奥谷西遺跡」(『京都市遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 35 岩松保「ケンケ谷遺跡」(『京都市遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 36 『半田遺跡発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会 1975
- 37 福知山市教育委員会崎山正人氏教示。
- 38 同上
- 39 『京都市夜久野の文化財』夜久野町教育委員会 1981
- 40 注39と同じ。『古代のまつりとくらし』京都市立丹後郷土資料館 1979
- 41 辻本和美ほか「石本遺跡」(『京都市遺跡調査報告書』第8冊)(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1987
- 42 『亀ヶ崎遺跡群』豊岡市教育委員会 1982
- 43 『中ノ郷・深谷古墳群』但馬考古学研究会 1985
- 44 オテジ谷遺跡現地説明会資料 弥栄町教育委員会 1990
- 45 佐原眞「農耕の開始と階級社会の形成」(『岩波講座日本歴史』1 岩波書店)1975
- 46 石黒立人「弥生時代尾張地方の(田廓集落)について」(『年報』愛知県埋蔵文化財センター) 1986
- 48 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセツルメントシステム」(『奈良大学文化財学報』第3集) 1984